

達はお互いに無事を喜び合いました。早速持ってきてくれたおにぎりや梅干のあの味は、一生忘れる事が出来ません。友人の皆様と分け合ってたべました。その空襲が終って廃墟と化した梅田の街に度々艦載機が現れて屋上すれすれに飛来して機上の兵士が銃をか



敗色が濃くなるにつれて、少年兵の採用も増えていった

まえている姿が見えるくらいに低空飛行して、鉄筋の柱の蔭に身をひそめて勤務したものでした。父母は一日も早く勤めを止めて帰る様に説得に來ましたが、病院側としても重症患者が残っている以上なかなか止めさせてはくれません。当時では、もう誰もが今日一日の命はわからないものと知らぬ間に覚悟していた様な気がします。そんなわけで、「あー今日も一日無事に命があったね」これが、人々の会話の一つだったのです。そんなうちにも日本の戦局も最悪を極め、遂に広島、長崎へと原爆が落とされました。天皇陛下の玉音を聞き、長い長い戦争がやっと終わった事を知りました。

その時の感想はと問われれば、先ず第一に今からもうあの恐しい空襲が絶対にないのだと言ううれしさ、そして自分の兄をふくめて数多くの人々がどんな気持で戦地で死んで行ったか、又遺族の方々の気持等を考えると残念の一語にしかつきませんでした。

終戦後の病院は、病人は病室へ入れる限り入れ、あふれた人々は廊下にござを敷いて収容しなければとてもおっつかない有様で、人員は不足し夜を日

について看護に当りました。肉親と離ればなれになって身元も解らない病人、道路のそこそこに食べるものがないくて行き倒れになっている人々、闇市でけんかをしてけがをした人々等々、次々と運ばれて来て病院はさながら戦場の如き有様でした。

けれども、私達は一生懸命に働きつづけました。今思ってみれば、よくもまあ体がつづいたものと思います。それは、やはり若い力があつたからです。惜しみなく此の肉体をつかいこし

我が青春を悔いなく思う キヌ
戦争を知らない今の子供達、又若い人達に、たとえ私の様な小さな体験にせよこれを後世に伝える事は大きな役割である様な気がします。現代の子供達の中には貧乏と言う言葉を知らない子がいると言うことを聞いておどろきました。

今や経済大国日本の現在かかえている諸問題——たとえば貿易摩擦、発展途上国の援助の問題、その他もろろと問題をかかえ大変だと思いますが、何卒この様な戦争を再び繰り返さない様に、国としても世界の平和のためまい進されることを強く望むものです。

後私の人生に役立った事を付記する。

(中略)昭和五二年五月二十日記。(戦陣日記、原文のまま)。

七月三十一日 (月) 晴

愈々明日出発だ。内地の人達に便り出せないのが残念だ。然し戦友に出して戴く様にしたので何んとかなく安心だ。夜中隊長殿以下全員会食する。中隊長殿が私を呼ばれ表彰上申の件、俺はやるぞ(勤務品行抜群のため聯隊より一名代表として師団に表彰の上申する)。

八月一日 (火) 晴

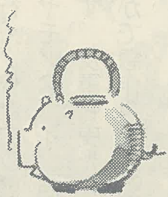
七時より軍装検査実施。最後に軍旗に別れの式が実施された。中隊長以下全員に見送られ一七時聯隊を出発する。一年余り苦楽を共にした戦友と別れるのは何んとかなく淋しい。戦友の目には涙が出ている。一七時四〇分訓戒駅に着く。国防婦人会の接待を受け、聯隊長以下将兵に見送られ、一八時五〇分乗車開始。これが最後だと思うと何んとかなく……一九時一〇分汽笛一声一年有余苦楽を共にした土地を離れる。戦友よ、さらば……

八月八日 (火) 晴

三時三〇分起床 ノモンハンに向って車輛にて出発。二里余り前進其の後には行軍だ。砲弾の音が聞える。空中戦が始まった。敵味方入り乱れての空中戦だ。友軍の高射砲がどンドン撃って居るがなかなか当たらない。敵の砲弾が近くに炸裂した。愈々戦場に来た。何んとかなく緊張してきた。然し皆元氣なり。死は元より覚悟のうえた。敵の砲弾何人か、何んのそのドントコイ。俺達の休んで居る百米前方で氣球が上った。一同驚いた敵機が飛んで居る一同危いと思つて見ていると突然氣球が降りて来た。すると東方より飛行機三機飛んで来た。友軍機と思つて居ると我々が休んで居る附近から重機が撃ちだした。オヤッ敵機かと思つた瞬間敵機が低空し機上から撃ち出した。ものすごい。初めて見た空襲だ。然し我々一同無事だった。飯を焚きだしたが、水が無い汚い水を取りやいだ。実に水の有難みが知れる様だ。飯が焚けた。しばらく休む。須見部隊の軍旗を拝す。聯隊長の訓示有。我々三年兵に期待する事多しとの事。光輝ある軍旗に対し

汚辱の戦い

ノモンハン事件参戦記



杉谷 辰男(津久野支部)

(前略) 先日子供達から、親父の人生、特に子供等の知らない時代の出来事、私の生いたち、更にノモンハン事件の参加等について記録を残す様にとの申出があり、文才のない私がペンを取る事にした。戦後三十年経過し戦争を知らない子供達、いやもう立派に生長した、青年達に再度戦争の悲劇(私の場合汚辱)を味あわしたくない。然し私この六日間の出来事が、体力の何倍かは、氣力による事を体験し、事

でも我々一同一死報國御奉公に邁進せねばならない。明日各中隊に配属される。今夜は聯隊本部の壕で寝る事になった。

砲弾の音が聞える……

八月十九日 (土) 晴、雨

今日は久しぶりに洗濯した。半月余り入浴せんせいかアカで真黒だ。ハダカで洗濯して居た上空を敵機が飛んで居る。友軍の高射砲が撃ち出した。チヨットこの風景は内地の兵隊さん達には見られぬ事だ。砲弾の炸裂がモノスゴイ……今夜も〇〇作業に行かなければならない。三時頃から又雨になった。一日天気だと又雨だ内地の梅雨の様だ……夜作業に行く。作業中夜襲を受ける(敵機)イヤモノスゴイ。照明弾を落し爆弾を落とす。友軍も曳光弾を撃つ其のスゴイなかで急作業を実証し無事に帰隊する。

八月二十五日 (金) 晴

昨日より引き続き警戒につく敵兵の姿がありありと見える。朝からまた砲弾が撃ち出された……食物がなくなつた。副食物がないだけで米があるの



B29の焼夷弾にも対抗できると、だれもが信じさせられていた……

なく昼となく、空襲警報が鳴りっぱなしで、ひとときも心の休まる時はありませんでした。

警報が鳴り終わらない間に、空を見上げるとB29が大編隊で来襲です。飛行機が点に見えるほど、それだけ高度が高く、飛行機雲を長くひいて悠々と飛んでいるのです。それが、五機や十

何んか力強い。然し煙を上げる事が出来ないので炊く事が出来ない。今日一日中飯を喰う事が出来ないようだ。

『分隊長として兵を指揮しながら射撃中、迫撃砲弾にやられる。午前九時頃、それから数時間後、小坂班長に壕から助け出され逃げる途中、小坂班長砲弾で足をやられ、又俺を助け様として、大宮一等兵手をヤラレル。其の間物凄い砲弾の中、山県部隊の位置迄下る。』

八月二十九日 (火)

夜部隊と共に下る。途中敵に発見され、戦車に追われ、戦友達大部分、ヤラレル。途中迄小坂班長と行動を共にして居りしが、別れてしまふ。午後三時野線病院迄辿りつく。小隊長にも会う……当夜出発ハイラル陸軍病院に向う。

八月三十日 (水)

午後四時無事に着く。皆と別れ別れになった。

何んとか淋しいがしかたがない。何百名の戦傷者 当夜は病院に寝る。満員だ。病院生活第一日』

『』は負傷後 ハイラル陸軍病院

機ではありません。それはそれは、数え切れない数だったのです。

ちょうど学校の上が方向を変える位置だったのでしょうか。下から見ていると直角に曲っているかのように見えました。爆弾投下、機首に黒い煙がもやもやと出ると、黒ごまのようなものが一斉にふき出して轟音と共に斜に落ちていくのです。B29の高度が高すぎて、高射砲からいくらうっても当るはずがありませんでした。手の施しようもなく、ただ、ぼう然と見守るだけでした。

当時、大首根^{オオソネ}には、巨大な三本煙突がそびえ立ち、航空機を造る大工場がありましたので、B29の集中攻撃を受けたのです。

奈良県から、たくさんの中学生在が工場に動員されてきていました。雨、あられと落ちてくる爆弾の犠牲になって大勢死んでいきました。今、考えられないような工場内退避だったのです。

一夜にして焼土に……

三月十二日だったと思います。東京について夜間大空襲がありました。そ

にて 左手で書く

空襲



岡野 和子(玉手山支部)

疲れた夜は今になっても、グラマンに追いかけられ機銃掃射をあびている夢をみるのです。それだけ強烈に心に刻まれているのでしょう。

今から四十三年前、私は愛知第一師範学校の生徒でした。学校は名古屋市の西区、中心部より少し離れたところにありました。

敗戦の年、昭和二十年に入ると夜と

れまでは、夜間は、一機ずつ波状的に入ってきたのですが、この夜は、大編隊を組んできて、名古屋市の中心部をねらいました。一夜にして焼土と化し、逃げ場を失った人達が、黒ごまになって死んでいきました。それは、それは、この世の地獄だったのです。

夜間空襲には照明弾を使いました。火の玉のようなものが、校舎の屋根の上に一列に並ぶと、あたり一面、月夜よりも、もっと明るく、不気味な光を放って照らし出すのです。防空壕の中に入っている、みんなの顔がはつきりと見えて、じっとしてはいられない気持ちにさせられたのです。

始めに侵入した一機が、照明弾を投下して目的地を確認しておいて、次からの飛行機が爆弾攻撃をしていったのです。群がって逃げまどう人達の上から爆弾投下、もう、一秒さきの命が保障されない戦場だったのです。

私の学校も、六月に入ってから、朝からの大空襲で焼けてしまいました。この日は、残っているところを油脂焼夷弾で焼きつくしてしまったのです。電車の停留所、押切から天神山までの一区間、校舎が立ち並んでいました。